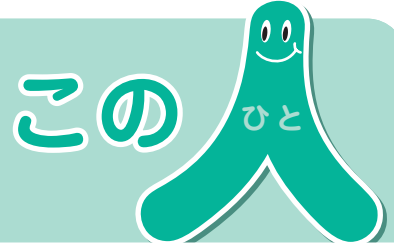




たか はた けい いち
高畑 敬一さん

特定非営利活動法人
ニッポン・アクティブライフ・クラブ会長



ボランティアを原点に、支え合いの 高齢者ネットワークを広げる

「60歳からの人生がその人の真価を決める」

長い第2の人生をいかに過ごすかは、高齢化社会の大きなテーマだ。26,000人を超える会員を擁する特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ(以下、「ナルク」という。)は、そのユニークで楽しい活動が多くの人を惹きつけ、全国にネットワークを広げている。

会長を務める高畑敬一さんは、現役時代、“バリバリの仕事人間”だった。全国を飛び回り、家族と過ごす時間はほとんどなかったという。何の疑問も感じていなかったが、定年を迎えようかという時に「これからの人生をどう生きようか」と真剣に考えた。「教育者である森信三先生の“60歳からの人生がその人の真価を決める。だからこそ現役時代の何倍もの緊張感をもって生きなさい”という言葉に非常に感銘を受けました。そこで、定年後はボランティアで人様に尽くそうと決意したんです。」

全米退職者協会をモデルに

高畑さんが目をつけたのは「介護」だった。時は1994年。旧厚生省がようやく「高齢者保健福祉10カ年計画(ゴールドプラン)」づくりに取り組み始めたところだった。「当時、定年を迎えた夫が妻から“濡れ落ち葉”などと呼ばれ、嫌がられていると話題になっていました。そんな人も巻き込んで、“いい終局の人生をつくる高齢者の集団”をつくらうと考えたんです。」

現役時代に資料を取り寄せて勉強した「全米退職者協会(AARP)」をロールモデルにした。当時で全米に約2000の支部をもち、1300万人の会員を擁していた。その圧倒的な数から社会的な発言

力も大きい。「ボランティアをすることによって生きがいと健康をもらい、生涯現役を目指す。しかし万が一、病気になった時は会員同士で助け合える。社会的にも影響力がある。そんな組織を目指しました。」

マスコミを「使って」広報活動

介護ボランティアという高畑さんの発案に、「介護は女がするもの」「インドに井戸を掘るとか、スカッとするボランティアがいい」と、難色を示す人もいた。しかしあえて「介護」を選んだのは、高畑さんの“戦略”だった。「自分の地域で週に2,3日、継続的にやることで健康と生きがいをもらえます。それに当時はまだ介護ボランティアをする団体がほとんどなかった。マスコミに取り上げてもらうためには、目新しいことと社会問題に関わる必要があると考えた、介護を時間預託ボランティアでやると打ち上げました。」高畑さんの狙いは当たり、新聞やテレビがナルクを大きく取り上げた。設立総会には400人以上が詰めかけ、熱気でむせ返った。

ナルクの設立によって、高畑さんの人生は確実に豊かになったという。妻と一緒に弁当をもって講座に通い、共に介護ヘルパー3級の資格もとった。「妻も喜んでくれました」と目を細める。ナルクでは夫婦揃っての入会を奨励しており、それは7割にもなる。「共通の話題ができるから、夫婦の会話がはずむんです。現役時代より仲良くなりますよ。」同好会活動も活発で、多い支部では30を超える同好会がある。

人に尽くすことで健康と生きがいをもらい、自分が困った時には助けてもらう。シンプルでありながら豊かなつながりの時間預託ネットワークを全国津々浦々に張り巡らせるのが高畑さんの夢だ。